



せんしょう苑  
望洋荘 便り

第136号  
平成27年  
3月発行

## 東日本大震災後五年目に考えることは

社会福祉法人りんさく福祉会

理事長 須田 晃

平成二十三年三月十一日に起きた大地震、その一ヶ月後に発生した四月十一日の大余震は忘れられない大出来事であった。その時、当介護老人福祉施設である望洋荘はどのように対処したか。職員の全てが初めて対応した無我夢中の経験であった。その時の経緯はこれまでの『望洋荘便り』に掲載してきました。

### ◆ 平成二十三年三月発行 第八十八号

東日本大震災に遭遇す

東日本大震災「その時私は…」①

### ◆ 平成二十三年四月発行 第八十九号

東日本大震災後に続く余震と望洋荘の対応

東日本大震災「その時私は…」②

### ◆ 平成二十三年五月発行 第九十号

大震災後の望洋荘について

### ◆ 平成二十三年六月発行 第九十一号

いわき市息吹き返す 「日常診療、卸も通常体制へ」

### ◆ 平成二十四年三月発行 第壹百号

望洋荘便り百号発行記念に寄せて 「東日本大震災復興二元年に思う」

### ◆ 平成二十四年六月発行 第百二号

望洋荘における震災復興支援コンサートに感謝す

愛知県医師会交響楽団の大演奏会

### ◆ 平成二十四年九月発行 第百六号

豊間の復興を祈る

### ◆ 平成二十五年三月発行 第百十二号

その時、何を学んだか

「東日本大震災から二年目を迎えて」

東日本大震災は多くの人を恐怖のどん底に落とし込むほどの大事件でした。実際に遭遇したからこそ、私たちは貴重な経験をもちました。震災・津波・火災・原発事故による放射性物質の拡散・それに伴う風評被害。望洋荘でも、停電や水道断水・ガス供給断・食糧不足などが長く続きました。しかし、その間にも多くの方々の支援活動、市行政、自衛隊、地区の方々、家族会、各地ボランティアの方々などから復旧に向けてのご協力を得ました。この予想だにできなかった未曾有の災害を通し、多くの体験をしました。このことから、私達は何を得、今後何をなすべきなのか、それらを多くの方々に伝えると共に、評価を得ることも大事ではないでしょうか。

平成二十六年十一月二十六日に、栃木県社会福祉協議会主催による東日本震災地視察施設研修として、栃木県内から介護福祉関係十四施設の方々が来荘されました。その際の視察実施報告書が届きました。その内容には我々の気づかなかったものが沢山あると思うし、今後の災害発生時の対応に大いに役立つと判断し、その報告書を掲載します。

(次頁へ続く)

# 東日本震災地研修報告

## ◎参加した目的・理由

- ・平成二十三年三月十一日の東日本大震災を経験した望洋荘に避難施設としても経験された生々しいお話や、地域の方々にごんな貢献ができたのかをお聞きしたく参加した。
- ・災害時に必要な備蓄品や必要物品、その場にあつて便利だった物や欲しかった物、利用者の状態の変化や職員の対応方法を参考にさせて頂きたいと思ひ参加した。
- ・実際に震災を体験された方からお話を聞くことで、地域や施設等でのように対応すれば良いのか。その時の状況にもよると思ふが、少しでも多くの方法や手段・知恵を得て、万が一の時に備えたいと思ひ参加した。
- ・東日本大震災発生時、地域包括支援センター職員としてどのように地域と連携していけば良いかが、正直手探りの状態であつた。大地震や洪水等の災害が発生する確率は、ゼロではない万が一の備えとして、何を準備しておけば良いのか、災害に伴つて派生する様々な出来事などを心構えとして得ておきたかつた。
- ・以前、大雪で停電が長引いた事があつた。オール電化の為、暖房、調理用水の確保等で困つたことがあり、どのように対応したり、事前に準備していたのか等を学びたく参加した。
- ・当時の状況をまずは知りたい。現在、市との災害時協定に向けた締結を進めている。さらに、地域福祉活動計画の策定にあたり、その委員

の一人として当施設からも参加しており、その中でテーマの一つに災害対策が挙げられている。そうした状況の中で、社会福祉施設として何が必要かを考える機会とした。

- ・①震災・津波・福島第一原発の放射能についてのどのように乗り越えてきたのか。②施設の震災時の状況(利用者様・避難者・職員の行動)がどうであつたか。また、自分たちの施設も震災による被害にあつたため、その時の状況と比べ、他の施設はどのように乗り切つたのか。③実際に役立つたことや物、今後のために何を準備すればいいのか。

・震災時や、緊急時に、その場に自分も居合わせた場合、動揺してしまうと思われるが、冷静になつて行動することや、お年寄りに対しての声掛けなどを学びたいと思ひ、参加させて頂いた。

## ◎視察研修で学んだこと。今後施設においてどのように役立てたいか。

- ・考えられないような雑用が発生する。避難者を自宅に送るなどといった想定外の事も起こる。
- ・ロウソクや石油ストーブ、ガスコンロ等ひと昔前の生活必需品が便利だと改めて気づいた。トイレ使用時の紙の使い方。電気・ガスを使わずにすむ手間のかからない食事など考えさ



せられる。

・ラジオ局等への不足物資の情報、電力会社への連絡。

・備蓄品の種類と量(これがあつたら良かったという物)のリストアップ。

・日頃の地域との関わりが大切である事。バザーの売り上げを地域に寄付する等の事から地域貢献をしていく。

・困つている事、助けてもらいたい事を、多様な媒体を利用して発信していく。地元FMや、NHK、テロップ、YouTube、ツイッターなど。若い人がネット発信で活躍してくれた。

・高齢者、疾患を有する臥床者等は長時間の輸送では死亡リスクが発生する。そのため、災害発生時とはいえ避難での輸送にあつては家族等への事前の説明と合意を念頭に置かなければならない。

・断水時の対応。給水所だけでなく、水道局まで取りに行く方法もある。

・避難所として受け入れをする時は、避難者名簿を作成する。

・ガスボンベは必須である。火があれば、カップラーメンや非常食などがつくれる。不安な心理状況下での暖かい食べ物や心を和ませてくれる。ラップも多めに用意しておく。皿など洗わなくてもいいように使える。コミュニティーラジカ等も使える。備蓄品は多めに用意しておくが重要。

・災害時の訓練計画等を策定し、定期的な訓練は実施しているが、その後の体制等についてまでは考えが及んでいなかった。有事の際の勤務体

制についての大まかな確認と職員への周知が必要である。

- ・水・食料等の確保が、3日分では到底足りない状況であった。
- ・その場での対応・判断のむずかしさ、スタッフとの協力。今動ける人でどうするか判断する役が重要だと思った。
- ・被災後に避難するか(動くか)どうかの判断で、結果的に動かない判断が正しかった、との話を伺ったが、限られた情報を基にした難しい判断だったと思う。
- ・外部からの指示や援助よりも、当事者である自分たちの判断や主体的な行動で対処した内容を、多くの事例を挙げてお話しいただき参考になった。
- ・かけつけられる人員を迅速に配置し、動かせる組織をつくっておくこと。
- ・トリアージをして部屋の住み分けをして、ケアの効率化、安全性を担保する事。
- ・ライフラインが途絶え、電話が繋がらない、食料品・物質・ガソリン不足もあり自然災害の恐ろしさ、命の大切さを実感させられると共に、利用者様が一丸となり、普段、ポーっと思っているとされた方も、水汲みが仕事と自発的に動いてくれ、見直したとの事。
- ・食事は2食、山から枯れ木を取って来てサバイバル生活をされた。
- ・入居者の家族が食べ物・オムツ等を持参してくださった。職員としては心強い。入浴はしばらくお休みとし、排泄はペーパーを別に使用済みの水で流す、食器にサランラップを被せること

で、食器洗浄をまめがれるなど大変参考になった。

- ・①震災直後と一週間インフラ途絶状況での施設の対応、取組みの姿勢。②入所者、利用者、医療が必要な方々への介護、転院対応。③指定避難所としての在り方。④スタッフの勤務体制と対応取組みの姿勢。⑤備蓄食料、飲料水、備蓄品の揃え方、活用方法。⑥施設運営全般。
- ・お年寄り達は、第2次世界大戦を経験した人が多く、思っていたよりも動じなかったとお話を聞き、「そうなんだ」と驚くと同時に、お年寄りは、精神的にも本当に強い人なのだなど改めて学んだ。
- ・緊急時の食糧備蓄(カンパンは不向き、缶詰パン、缶詰おかゆは便利であった)。非常用物品(石油ストーブは暖房としてだけではなく、煮炊きにも使用できる)。自家発電機(カセットコンロ式2本で2時間発電出来る)。
- ・災害時の緊急電話として、望洋荘ではピンク電話がとても役立った。
- ・マニュアルは必要だが、その時々に対応できなければ意味がない。色々な災害を想定した避難訓練の実施や、今回伺った話を研修に活用し、災害が起きた時に何が必要なのか職員全体で話し合います。
- ・停電時、水道が使用できず、暖房、調理ができない時期や、市役所、ご家族等からの援助等が一切なかった時期があり、大災害が起こったときを考え、食料、備品等を準備したい。
- ・望洋荘の体験を皆に教え、常に頭の中に入れて

- ・おきたい。避難訓練の時に取り入れていきたい。今回、伺ったお話を報告書としてまとめ、施設に紹介した。備蓄について再確認ができた。地域の災害時の対応としても参考にしたい。
- ・在宅ではあるが通常の避難所へは避難できない高齢者の方(虚弱、在宅酸素使用、ストーマ装着、認知症の方など)や家族の方に備えておくという方たちの自宅が被害を受け、避難せざるを得ない状況の時には福祉施設等に橋渡しのお手伝いをしたいと思った。
- ・備品等については、施設保管分とは別に給食委託業者と改めて提携する。
- ・地域の自治会長、民生委員等との連携や、職員安否確認方法の連携網の作成。
- ・食料確保のためにも業者との連携。災害マニュアル作成。地域行政との連携。基本的な防災準備に遺漏の無いよう、日常的に対応する。普



段から地域社会や関係機関また職員同士、密にコミュニケーションを図り信頼関係をより強固にしておくよう心掛ける。

・「災害・非常時マニュアル」の見直しと定期的な読み返しが必要だと思った。現在施設では、自家発電機・石油ストーブ・卓上コンロ・3日分の水・食料品(カロリーメイト・缶詰・乾パン・その他)やオムツを備蓄しているが、今回の望洋荘のお話から、備蓄は1週間分のストック、並びにいつでも、すぐに使えるような定期点検の重要性を感じた。そして職員と利用者様とで、常日頃から災害や非常時の心構えについて話し合いの機会を持ち、意識付けをするようにしたいと思う。

・事例報告として具体例を挙げながら、全体研修を開催し防災意識の高揚に努めたい。防災委員会でも資料を確認し、定期的な委員会活動の検討事項として取り組む。



### ◎感想

・福島第一原発の被ばくが今なお甚大な影響をもたらしていること。

・若い住民は地元産のコメや食料を食べていない、放射線量が基準値以下でも食べれない、福島の港に荷揚げされた魚は売れず安くなるなど、今も甚大な被害となっている。

・地域の拠点施設になる特養にはとても良い研修になった。また他施設の皆様との交流ができ、つながりが広がった。

・施設長・事務長などから、いろいろな体験を聞いた事は、とても勉強になった。施設長が2ヶ月も寝泊まりしたり、職員も3〜5日交代で入居者の面倒を見たりと皆の協力があつたから出来たことだと思う。私達も入居者の為に職員の協力をいっそう強めていきたいと思った。

・施設長、事務長などの話を伺っていると、過度に身構えたり極端な行動を取ることなく、自然体で対処してきた様子を感じ、それが良い方に作用したと思う。そして、そうできた背景には、施設の主役たる利用者の方たちが、災害とそれによる生活の変化に泰然と構えてくれたことが大きく、職員達の方が救われた面も多かったのではないかと感じた。

・自分の中で逃げる事と、とどまってしのぐことが、頭の中でまぎって考えていたが、お話を伺うことで、整理された。すぐにやらなければならぬことが見えた。企画していただき誠にありがとうございました。

・TVで被災状況を何回も拝見していたが、実際に海をみた時、「この海がこの辺まで来たの

か…」と考えていながら海をみていました。小さいお子さんからお年寄りまで苦しい思いをしたのだなと思い、言葉にならなかつた。でも、皆、まわりの人達と助け合いながら人を思いやり、強く生きていた事を知り、あまい生活をしている私は、もつと強く、1日1日を大切に生きていかななくてはと考えた。

・直接話を聞いたことは、貴重であつた。災害に遭遇した方が知るリアルな内容であつた。

## 四月お誕生日の皆さん

### 【望洋荘】

四月 四日(土) 薄磯ユニット

佐藤 勝明 様 九二歳

四月 一四日(火) 四倉ユニット

渡邊 ハツ子 様 九三歳

### 【せんしろう苑】

四月 二八日(火) みまや東ユニット

大内 トヨ子 様 九三歳

### 編集後記

『せんしろう苑・望洋荘』便り

平成二十七年三月三十一日発行

発行所 いわき市平豊間字合磯三十九番地

社会福祉法人 りんさく福祉会

地域密着型介護老人福祉施設 せんしろう苑

介護老人福祉施設 望洋荘

電話 (0246)38-6331  
電話 (0246)55-7373